

和歌山県名匠

おお かわ
大 川

ひらく
啓

(経歴及び業績)

16才の時、新宮市の大川鍛冶に弟子入りし、10年間の修業を積んだ後、見込まれて鍛冶場を継ぎ、刃物鍛冶として一筋にこの道を究め今日に至る。

新宮は古くから鍛冶が栄えたところで、農具、漁具、また武器等も製造していたが、明治以降は伐採用のよき、なた等の刃物や筏のかんが主に作られるようになった。

昭和7年には新宮市内に30軒もあったといわれる鍛冶屋が、昭和35年から筏流しもなくなり、また山仕事の減少等により次第に少なくなっていった。

このような情勢のなかで、一時期には10名を越える職人を抱えたこともある大川鍛冶も縮小したが、氏の作る造林がま、枝打ちよき等は優れた製品で、県内はもとより東京周辺をはじめ各地からの注文も絶えることなく、跡継ぎの長男 治氏とともに昔ながらの技法で鍛冶職を続けている。

製品の完成までにはさまざまな工程があるが、なかでもはがねの選別、そして焼き上げが最も重要であるといわれ、長い経験を通して体得した氏の技術は高い評価を受けている。



職 種 鍛 冶 職